

ザ・トライアングル
The Triangle

インスタレーション作品
《幾つかの長い話》

2023

ミックストメディア

サイズ可変

《長い話》

2023

音楽、ナイロン・パーカー

5分 ループ(ヘッドフォン) /
2分30秒 ループ(スピーカー)

作詞・作曲：米村優人
女声：成瀬凜
男声：椿野成身
録音：倉知朋之介、大澤一太

米村優人：
BAROM
(あるいは
幾つかの長い話)

6/20-9/24,
2023

① 《「行くことのない展示の
プラン」の(映像)》(2023)

映像 3点

各5分 ループ

② 《AGARUMAN》(2018)

ライムストーン 4点

30.0×18.5×17.8
24.5×17.5×16.0
31.4×17.0×17.0
36.8×29.3×20.0

③ 《P.R.(Lamborghini)》(2023)

スタイロフォームに塗装、
木、鉄

91.0×184.0×1.8 /
frame 244.0×246.0×4.0

④ 《我(WE)》(2023)

発泡スチロールに樹脂加工、
塗装

184.0×92.0×25.8
172.0×82.5×20.0
148.5×81.5×20.1
107.0×92.0×90.0

⑤ 《First Lovers》(2023)

発泡スチロールに樹脂加工、
塗装

242.0×185.0×194.0

⑥ 《立ち上がるための
タクティクス》(2023)

ハンダ鑄造

10.5×11.0×0.5

⑦ 《Dog fight》(2022)

樹脂(擬似ブロンズ)

20.5×13.9×32.0

⑧ 《Chokoku there my
head (in my monitor)》(2023)

椅子(既製品)、サイドテーブル
(作家制作)、モニター

⑨ 《P.R.(Ferrari)》(2023)

スタイロフォームに塗装、
木、鉄 2点組

a) 118.0×331.0×1.8 /
frame 280.0×472.5×6.0
b) 160.0×315.0×94.5 /
frame 280.0×410.0×75.0

⑩ 《「行くことのない展示の
プラン」の(バナー)》(2023)

展示プランのドローイング(紙
にペン)をメッシュターポリンに
拡大出力 3点

148.6×210.0 each

⑪ 《AGARUMAN》(2018)

ライムストーン

27.5×19.2×25.0

⑫ 《「BAROM(あるいは幾つか
の長い話)」のために作られた
一つだった2体の像》(2023)

発泡スチロール、
紙粘土 2点組

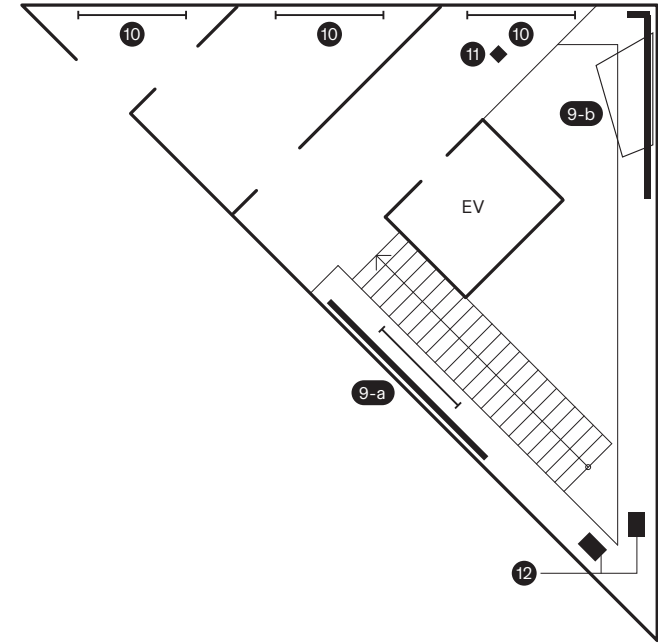
180.0×92.0×42.5 each

⑬ 《「BAROM(あるいは
幾つかの長い話)」のために
作られた犬》(2023)

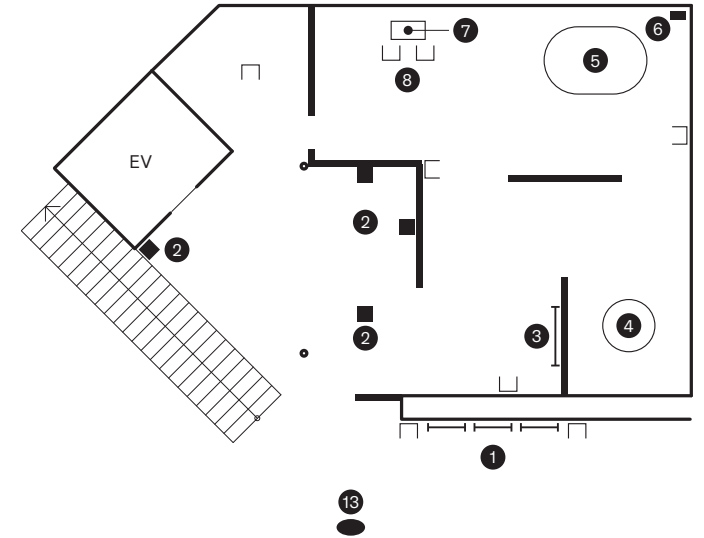
発泡スチロール、木工用パテ

88.0×72.5×44.0

1F



B1F



米村優人： BAROM (あるいは 幾つかの長い話)

6/20-9/24,
2023

インスタレーション作品
《幾つかの長い話》

本展は全体で一つのインスタレーション作品を構成している。立体造形とその空間構成によって、作家の個人的な話と長大な彫刻史とをつなぐ試みである。

《長い話》

米村優人が作詞・作曲した「ラブソング」。「愛」は常に作家にとっての重要なテーマであり、「幾つかの長い話」に徹底するように会場で流れている。

男声、女声、はな歌の3つのバージョンをスピーカーおよびヘッドフォンから聴くことができる。

また、作家は歌詞を刻印したオリジナル・パーカーも制作した。看視員が羽織っているかもしれない。

① 《「行うことのない展示のプラン」の(映像)》

導入部にあたるタイトルウォールの上部には3台のモニターが設置され、そこに3枚のドローイングが映し出されている。中心を意識したシンメトリーな構図のこれらドローイングは、「行うことのない展示のプラン」の立面図である。

ドローイングには、極めて正統な展示方法が図示されているが、実際の展示はこれとは明らかに異なるルールで行われている。このことに気づいた鑑賞者は二つの異なるルールを意識しながら作品を鑑賞することになる。

② および ⑩ 《AGARUMAN》

頭部の石像。モチーフは超人・サイボーグ(昭和期のテレビ番組のヒーローなど)

と類人猿・猿人。また古代ギリシャなどの彫像の頭部も参照している。

「アガルマ(agalma)」はギリシャ語で彫像を意味する。タイトル「アガルマン」は「アガルマ」と英語の「マン」を合体させた造語(ローマ字つづりの誤記はそのまま残した)。

半永久的に残る石という古代より用いられてきた材によって、神ではないものを表現した。地下ギャラリーに4点、地上エレベータ脇に1点、展示されている。

③ および ⑨ 《P.R.》シリーズ

スーパーカーのレリーフ。

タイトルの「P.R.」は、英語の「props」(ヒップホップでよく使われる)の語源である「proper respect」の略。「gotta get my props」などという言い回しでよく使われる。「名声(評価、賞賛)を勝ち取らなあかんねん(この環境から這い上がるために)」というような意味となる。

かつてのレリーフ(浮き彫り)は神殿や王侯貴族の居城の装飾として作られ、そこには何らかの寓意(アレゴリー)を表す物品が採用された(主人と馬[や騎馬・戦車]など)。その形式(スタイル)を流用しながら、「P.R.」ならぬ「ステータス」の表層のみを抽出して提示する。地下ギャラリーにランボルギーニ、1階のガラス面にフェラーリが2点、展示されている。

「私は(早く取りたいとは思っているが)運転免許すらなくて車にあまり興味がありません。でも信号とかで立ち止まっている際に、高級車が目の前を走ると乗っている人の顔を見てしまいます。(それはその人を嘲笑したいわけではなく)どんな人が乗っているのがただ気になるんです。」(米村優人)

④ 《我(WE)》

発泡スチロールに樹脂と青銅色の塗料を塗った擬似ブロンズの群像。《我(WE)》シリーズの最新作。

モチーフとなる人物は、性別、属性、ポージングが混ざり合い、合計4体で構成される。平行にいくつもの切れ込みを入れる石彫や木彫で扱う技法をブロンズに擬した発泡スチロールの削り出し造形に用いるなど、彫刻技法と表現のリミックスでもある。

「“群像”は一つの台座に幾つかの像が何らかの意味を持って配列し構成され、一つの像となります。“私”を語る時、その周りを取り巻く“私では無い他者”を意識することになり、それは群像のように“私たち”を思うことになるのではないのでしょうか。」(米村優人)

⑤ 《First Lovers》

直訳すると「初めての恋人たち」。男女(と思われる)二人の人体は完全に一体化している。ロダンの《接吻》へのオマージュとして構想されたというが、作家の錯綜するさまざまな思いが昇華され、純粋な「動勢(ムーヴマン)」が抽出されたような目覚ましい造形となった。

クロムメッキを模した塗料を塗布しているが、未塗装で発泡スチロールが剥き出しの部分も意図的に残してある。

この作品についての論点は多岐にわたり、例えば、愛について、近代彫刻と前衛芸術(キュビズムから立体未来派などまで)、彫刻における表面と内側の問題などが折り重なる。いずれも「幾つかの長い話」としてある。

⑥ 《立ち上がるためのタクティクス》

銃のかたちをしたメリケンサック。自作のダイキャストから制作したオリジナル。

もっとも手近な武器の一つであり、また、もっとも脆弱な武器であるとも言える。銃の形をしたメリケンサックは、銃としての機能は持たない。しかし構えると銃を持っているような手応えがある。隠しきれない弱さを持っている作者は、これを身につけることで、辛うじて強く見せようとする、そうした自分自身のメタファーとしてこのモチーフを扱っている。

「時折、僕は弱い人間だと感じます。けれども自分を信じてしまうときがあります。」(米村優人)

⑦ 《Dog fight》および

⑩ 《「BAROM(あるいは幾つかの長い話)」のために作られた犬》

米村の実家ではかつて犬を飼っており、自身は「犬派」だという。

人類史の中でも狩りや生活の中でパートナーとして飼われてきた犬は、人間にとってもっとも都合の良い動物だと作家は言う。人間は、犬から勝手な感情を汲みとったり、品種改良を遂げてきたりした。そのような背景から人と最も近い関係を持つ「圧倒的他者」として、犬は米村の作品にしばしば登場する。

⑧ 《Chokoku there my head
(in my monitor)》

看視員のために用意された既製品のひとり掛け用の椅子が、二つセットで置かれている。その前のテーブルの上に設置されたモニターには、カメラを通して1階の彫刻作品が映し出される。

作者は「インスタレーション」を、絵画、彫刻など既存のメディアの変容として捉えており、今回は看視員のための椅子、あるいは看視員自体もインスタレーションの一部として、同じ変容した構造に組み込まれたものと構想している。(なお、看視員は会場内を巡回することを基本的に、これらの椅子、あるいはこれ以外の会場に配置されている椅子に座ったりすることができる。また、どの椅子にも鑑賞者は座ることが可能である。)

⑩ 《「行うことのない展示のプラン」の(パナー)》

A3サイズの紙にペンなどで描いた展示プランのスケッチを拡大出力したパナー。映像と同じで3点ある。

⑫ 《「BAROM(あるいは幾つかの長い話)」のために作られた一つだった2体の像》

一つの発泡スチロールから男女が一体化した人体像の輪郭を削り出し、最後に半分に切断してその切断面を外向きに展示した対の作品。

二人の人物が抱擁しあう輪郭には後頭部はあるが顔はない。切断面は、人体の内部ということになるが、ここになんら意味を構成する内実はない。顔がないので表情はないが、その代わりに断面に星形が二つ並べられている。